

対話で導く 成長する力

コミュニケーション学習塾「ジョブサU18」



輝く教育

「あなたはかき氷を食べ
ています。『でも』でつな
がる文章を考えて」。

コミュニケーション学習
塾「ジョブサU18」では、
接続詞に続く文章を作って

スピーチの練習をする。立
川市の立川南口教室に通う
高1の大塚竜輝さん(16)
は、「でも、食べ終わった
あとのゴミ箱までの距離は
500メートル以上あります」と
答えた。接続詞は「つま
り」「そして」と、次々と
与えられる。

ジョブサでは、発達障害
や知的障害のある子どもた
ちが、自分の気持ちを表現
する方法や、周りの人との
コミュニケーションの取り

方を、五つの段階に分けて
訓練する。周りの状況を把
握し、話したい内容を文章
にする。その文章のなか
で、さらに適した言葉に置
き換える。相手の反応を想
像してから、勇気を出して
話す……

大塚さんは小さいときか
ら、電車の名前や聞いた話
をすぐに覚え、一度聞いた
曲をそのままピアノで演奏
できた。ただ、自分の気持
ちを言葉で表現することは

スピーチの練習をする大塚竜輝さん(右)＝立川市柴崎町



苦手だった。中学はフリー
スクールに通って1対1で
学び、同世代の子との交流
はあまりなかった。今も習
い続けるピアノの先生の勸
めもあり、昨年6月からジ
ョブサに通っている。高校
は、自分のスタイルに合わ
せて登校日数を選べる通信
制の学校に進んだ。

授業はまず、体操で身体
をほぐし、声を出す練習か
ら始める。グループで学習
し、カードゲームなどの遊
びから集団ルールも学ぶ。
初めて、家で友だちの話
をするようになったという大
塚さんは困ったことを口に出せるようになり、「気持ち
ちが落ち着いてきた。滑舌
も良くなった」と笑う。

運営する「ロクマル」
(本社・千代田区)は現
在、全国10カ所でこうした
塾を展開している。うまく
会話ができずにいじめられ
るなど、傷ついた経験を持
っている生徒が多く、少人
数のグループで勉強するこ
とで、安心して話ができる
環境を作ることが心がけて

いる。一方的に自分の話ばかりしてしまふ子には、「人が話すときは待つ」というルールを伝え、待てたときにはその都度ほめる。ほめられる経験が増える
と、自分の番を待てるようになるという。

高倉秀穂社長(48)は「ダメだと指導するのではなく、先生が笑顔で話を聞くことで、子どもの心が満たされて余裕が出来る」と話している。コミュニケーション力が伸びれば、学習や就労支援にもつながる。「子どもは成長する力を必ず持っている。ただ、スピードに差があるだけ。ゆっくりでも良いんだという安心感を与えたい」という。(平岡妙子)